

土をろくろに乗せ成形する





天日干しで乾燥中の土と作品



窯入れ時、並べられた作品



焼き締めに使う10トンの赤松薪



7昼夜交替で燃やし続ける

自性寺焼との出会い

陶芸苑を開いたのちの昭和53(1978)年、青木さんは当時の自性寺焼の古窯跡の陶片をもとに調査研究を重ね、辺りを駆け巡り下秋間から産出する高品質な陶土をおよそ1,000万年もの前の地層から見つけることができました。

翌年、その近くに陶房里秋窯を開設して自性寺焼を復興させることができました。青木さんの「その地の土で焼き物をつくりたい」という思いが叶った瞬間でした。

昭和63(1988)年には、全長9メートルの登り窯を築き、焼き締めの技法を研究しました。

青木さんの作品には、焼き締めによる作品と、釉薬を掛けて金の結晶が花開いたような金花紋(きんかもん)や、木灰釉(もくはいゆう)と藁灰釉(わらばいゆう)を掛け合わせ、銅とコバルトを加えた釉薬で紫陽花のような紫色を発色させた鈞窯釉(きんようゆう)などの独創的な作品があります。

また、自性寺焼は県のふるさと伝統工芸品にも指定されています。

次の世代へ

青木さんは、自性寺焼を次の世代へと引き継ぐことが自分の使命だと考えています。そのためにも、陶土の生成から作陶技術などの技法を伝授し、一度消えてしまった自性寺焼の灯がまた消えてしまわないように、さらには、自性寺焼を通じて、この地が、安中市が発展していくことを切に願っています。

↓焼き締め作品は、登り窯や穴窯にて焼き、薪を燃やした灰が作品に付着して溶けることで生まれる「自然釉(ビードロ)」などの独特の風合いがとても魅力的です。窯入れ時の配置場所や焼いている際の灰の掛かり具合によって、作品ごとに異なる表情が生まれ、ガスや電気の窯では決して表現できない非常に難易度の高い技法により作られたものです。



窯から出たばかりの作品を見る青木さん

